



## 令和元年度英語教育実施状況調査結果① 英語力、英語使用状況に課題

令和2年7月15日に、昨年度の英語教育実施状況調査の結果が文部科学省により公表されました。

### 1 中学3年生の英語力

中学3年でCEFR A1（英検3級等相当）レベル相当以上を取得している（またはCEFR A1レベル相当以上の英語力を有していると思われる、以下同じ）生徒の割合

全国（指定都市含む）44.0% 本県37.3%（全国比▲6.7%）

中学3年でCEFR A1レベル相当以上を取得している生徒の割合は、国の第3次教育振興基本計画（2018年度～2022年度）において測定指標が50%に設定されています。また、本県英語教育改善プラン（令和2年度）では、令和4年度の数値目標が45.0%となっています。

- 国は、中学校修了程度の英語力が身につけていることを目安としてCEFR A1レベルを基準としています。中学3年生の段階ではこのことを意識し、外部試験受検の有無にかかわらず、**生徒一人一人がCEFR A1レベル相当に達しているかを学習評価の機会に定期的に見取り、その結果に応じて指導改善に努めましょう。**
- 外部試験における聞くことや話すことへの不安を抱えている生徒に自信を持たせる意味でも、**授業の中で言語活動を意図的・計画的に設定し、英語を聞いたり話したりする時間を増やしましょう。**

### 2 中学校英語担当教員の英語力

CEFR B2（英検準1級等相当）以上を取得している中学校教員の割合

全国（指定都市含む）38.1% 本県23.3%（全国比▲14.8%）

本県の割合は昨年度から2.4%増えているものの、5年連続で47都道府県中46位という状況です。英語力が英語教師としての指導力と必ずしも一致するわけではありませんが、中学校学習指導要領（平成29年告示）が求めている「言語活動を通して資質・能力を育成する」ことや「授業は英語で行うことを基本とする」ことを授業で実現しようとするれば、中学校の英語教師は相応の英語力を有していることが望ましいと考えられます。

- 過去問や模擬試験を提供している検定もありますので、まずそれらに触れてみましょう。また、合否が出ることに抵抗があれば、**スコア型の検定を選ぶ**のも一つの方法です。現在の英語力を把握する意味で、まず一度受検することから始めてみませんか？
- コンピュータで受検するテスト**（CBT：Computer Based Testing）**を選択できる検定もあります。**

### 3 授業における中学校英語担当教師の英語使用状況

発話の半分以上を英語で行っている教師の割合（全学年計）

全国（指定都市含む）76.9% 本県67.1%（全国比▲9.8%）

新学習指導要領には、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。」（中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編p.86-87）とあります。今回の調査において、CEFR B2以上を取得している教員の割合が低い（47都道府県中40位）にもかかわらず、授業における英語使用状況が高い（同2位）県もありました。生徒が積極的に英語を使って取り組めるよう、まず教師自身が英語を使うモデルとなり、コミュニケーションの手段として英語を使う姿を示していくことが肝心です。

- これまで日本語での文法説明や本文の和訳などに偏った授業を行っていたならば、そうした授業の在り方自体を見直し、**必要な意味内容をいかに英語で伝えることができるかを考えて授業を工夫改善**していかなければなりません。（中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編 p.87）
- 既習の言語材料を用いながら教科書の内容を説明したり生徒とのやり取りを行ったりする**ことで、教師の使用する英語は生徒にとって効果的なインプットになります。（同 p.86）

# 指導と評価の一体化への道

## 第1回 そもそも、 「指導と評価の一体化」とは？

以下は、学習評価に関する高校生、大学生、社会人の声です。

出典：平成 31 年 1 月 21 日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会  
「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」

「通知表で数字だけ示されても分からないので、中身をもっと提示してほしいと思います。…（観点別評価ではなく）数字での評価だけでは、そう評価された理由を推測することしかできないということがあります。」

⇒ 学期末や学年末などの事後での評価に終始してしまうことが多く、**評価の結果が児童生徒の具体的な学習改善につながっていない。**

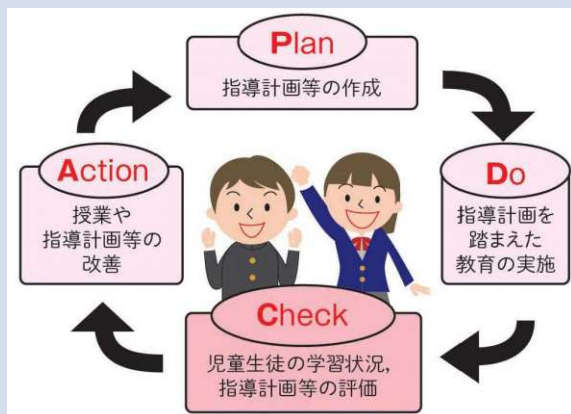
「授業中に寝たらマイナス1点、発言したらプラス1点といったように、学力とは直接関係のないことをポイント化して評価を付けているという現状が実際にありました。…それは科目に対する意欲ではなくて、授業に真面目に取り組むという意欲なので、本来評価すべき点とすり替わってしまっていると、私は思っていました。」

⇒ 現行の「関心・意欲・態度」の観点について、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、**性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解**が払拭し切れていないなど、本来の評価の観点の趣旨が踏まえられていない。

「先生によって観点の重みが違うんです。授業態度をととても重視する先生もいるし、テストだけで判断するという先生もいます。そうすると、どう努力していけばよいのか本当に分かりにくいんです。」

⇒ 教師によって評価の方針が異なり、**学習改善につなげにくい。**

こうした適切な評価を求める声に応えるためには、下図のようなPDCAサイクルを循環させることが大切です。この取組が指導と評価の一体化です。外国語科では、具体的には下記のような取組が考えられます。



※ 図は「学習評価の在り方ハンドブック」  
(国立教育政策研究所) より

**CAN-DOリスト**により学習到達目標を共有するなどして指導と評価の一体化を図る例

### 【Plan】

- CAN-DO リストの形で学年や単元、単位時間別に領域別の目標を示すとともに、パフォーマンステスト、ペーパーテスト等の評価方法や時期、評価基準（ルーブリック）を事前に示し、児童生徒や保護者と共有する。

### 【Do】

- 【Plan】で示した目標や評価方法を踏まえ、言語活動を軸とした授業を実践する。

### 【Check】

- CAN-DO リストをもとに、児童生徒が単元や単位時間を通して、目標に対してどの程度達成できたかを振り返らせる。
- パフォーマンステスト、ペーパーテスト等の結果を児童生徒に返し、達成状況や今後の課題を示す。

- CAN-DO リストの振り返りやパフォーマンステスト、ペーパーテスト等の結果をもとに、目標に達しなかった児童生徒への次時以降の手立てを検討する。（例：次時の Small Talk で目標に達しなかった児童と教師が本時の表現を用いてやり取りを行い、言語材料や表現の定着を図る。）

### 【Action】

- 【check】の振り返りを踏まえ、教師は次の単元や単位時間の指導改善に、児童生徒は学習改善につなげる。

「指導と評価の一体化」とは… 教師が指導計画や評価規準等を子どもと共有し、評価の結果をもとに教師の授業改善及び子どもの学習改善につなげること。